
思考技法としての現象学的〈批判〉： ハイデガーとメルロ＝ポンティに導かれて

坂本 拓 弥

抄録

本稿の目的は、〈批判〉という行為を1つの具体的な思考技法として捉え、それを現象学的観点から考察することによって、その実践的な在り方を明示することである。今日、〈批判〉という語は——批判的思考やクリティカルシンキングを含めて——さまざまな領域で用いられ、その重要性が指摘されている。しかし、それらが語られている言説を分析すると明らかなように、その意味は論者によって多様であり、また必ずしも学術的な論拠に基づいて論じられているわけではないようである。それゆえ本稿では、それを教養教育における思考技法として基礎づけるために、〈批判〉という語の淵源をギリシャにまで遡って論じているハイデガーの後期思想——特に『ツォリコーン・ゼミナール』——に基づいて検討し、それが本来、適切に〈分けること〉を意味していることを明らかにした。そのうえで、〈分けること〉としての〈批判〉を実践的に展開していくための基本的な考察態度を、ハイデガーと同じく現象学的な思考を展開しているメルロ＝ポンティの『行動の構造』における論理構造から抽出した。具体的には、メルロ＝ポンティの記述から、すでに〈考えたこと〉の影にある〈考えないでしまったこと〉へ目を向ける必要性が明らかになり、このことを、〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度として明確化した。さらに、その考察態度に基づいて、ある〈批判〉対象を最終的に乗り越える思考の在り方を、〈内破する思考〉という方法的手続きとして明示した。これらを踏まえて、最後に、教養教育においてこの現象学的〈批判〉という思考技法がどのように実践的に応用されるのかについて、現実的課題と併せて若干の展望を示した。

キーワード

批判的思考、クリティカルシンキング、教養教育、現代社会

1. はじめに：なぜ今〈批判〉を論じるのか

本稿の目的は、教養教育において批判という思考技法がどのように遂行されるかを現

象学的観点から検討し、その実践的な在り方を提示することである。したがって本稿では、批判的思考に関する従来の多くの研究がしてきたように、その多様な定義や内容についての分類や整理に議論と紙数を割くことはしない。むしろ、それらの議論の前提を問い直し、批判という語の本来の意味——すなわち、語源——から、その思考技法としての在り方を探求していく。もちろん、次節において、必要とされる範囲の先行研究を概観するが、それはあくまでも、この概念をめぐる議論の混迷を示すことを意図してなされるものである。

今日、批判や批判的思考、また横文字のクリティカルシンキング等の語（本稿ではこれらの概念を総じて、以下〈批判〉と標記する¹⁾）は、学術研究のみならず、さまざまな場面で用いられている。これは、道田が指摘するように、「それだけこの語が幅広く知られ、必要とされるようになってきている」²⁾ことのあらわれであるように思われる。このような現象は、「反知性主義」³⁾への警鐘が鳴らされてもいる我が国、より広くは現代の世界において、好ましいものと捉えることができるであろう。

しかし、そのような社会的要請は同時に、この批判的な能力がわれわれ現代人に不足していることを暗示しているとも言える。例えば、教養教育におけるこの問題について、日本学会会議の分科会は次のように指摘している。すなわち、21世紀の知識基盤社会と呼ばれる状況において、情報の発信主体であるメディアの在り方は、「学生の学習や人びとの意識・思考面での影響も拡大し、重大なものとなっている。簡便かつ迅速に利用可能な知識・情報が無限とも言えるほどに拡大している状況にあって、そうした知識・情報の全体像を把握することが難しくなるとともに、それらの日常的な利用・編集能力と批判的・構造的・創造的な思考力との混同や後者の低下が深刻化しているとの指摘もある。」（傍点引用者）⁴⁾つまり、今日の〈批判〉に対するさまざまな期待は、このような厳しい現実状況を背景として成り立っているのである。次節では、そのように多様な期待を背負っている〈批判〉がどのように論じられてきたのかについて、特に教育の文脈に着目して概観したい。これによって、〈批判〉をめぐる議論の混迷の一端が明らかになるであろう。

2. 〈批判〉をめぐる言説とその課題

2-1. 先行研究の概観

ここでは、〈批判〉に関する先行研究として、主に教育に関する議論を概観する。それらを概観することによって、思考技法としての〈批判〉をどのような視点から再考することが必要なのかを探っていきたい。

さまざまな学校段階における〈批判〉に関する研究は、文字通り、枚挙にいとまがない。例えば、柴田は国語科教育における批判的思考力（批判的リテラシー）育成の重要性を指摘している⁵⁾。彼によれば、例えば「説明的文章の場合は、それらの言葉や文の真偽や論理的整合性を吟味し、批判的に読み取る力をすべての子どもに保障すること」⁶⁾が必要であるという。彼は、大西忠治の実践論や学びの共同体に基づいた討論の授業を検討しながら、それらにおける批判的思考力の具体的な育成可能性を論じ⁷⁾、個性を發揮しづらいつつ日本的な風土の中で、子どもが「個人的性格を強化し、日本人の弱点でもある個人の表現力を高めるうえでも不可欠なのが批判的思考力の教育である」⁸⁾と結論づけている。論述の主題やその方法に差異はあるものの、この柴田の議論と同様に国語科教育に関連づけられた研究は、

言語的能力の育成と併せて盛んに論じられている⁹。

さらに言えば、それは国語科教育に留まらず、あらゆる教科において論じられているようである。例えば、竹田は高等学校の英語科教育の授業実践において、「理由と共に意見を述べる構成の型」を活用することによって、生徒の批判的思考力を育むことができると報告している¹⁰、また佐藤は数学科教育の領域において批判的思考の研究が進んでいないと指摘し、PISAの問題を教材とした授業実践を通して生徒の批判的思考力が育まれたと論じている¹¹。これらのほかにも、理科教育から社会科教育、さらには家庭科教育まで、批判的思考力に関する研究は多岐にわたっている¹²。

大学教育についても、批判的思考力の育成に関する議論は盛んである。田中・豊は「大学教育は、『考える力』を体系的に学び身につけることができる最後の砦だといっても過言ではない」¹³と述べ、その重要性を指摘している。また久保田・池田は、批判的思考力が中央教育審議会答申における「学士力」の中の「ジェネリック・スキル（汎用的技能）」にあたると述べ、それは「知的活動でも職業生活でも社会生活でも必要な技能」とされると指摘している¹⁴。加えて、このような諸段階の学校教育における〈批判〉については、海外においても同様の議論がなされており、この傾向はより強まっているようである¹⁵。

2-2. 先行研究における共通点と課題

以上の概観から、教育の文脈における従来の〈批判〉に関する議論に共通する基本的前提を指摘しておきたい。それは、〈批判〉が日常的な意味における非難や文句とは異なるという共通理解である。例えば、さまざまな場面で耳にする、「批判だけではなく対案を」という文言などは、まさに〈批判〉という語が単なる非難や文句といったネガティブな意味において用いられている典型例である。しかし、前項でも確認されたように学術研究のレベルにおいて〈批判〉は、伊勢田らが述べるように、「相手をけなすというようなニュアンスではなく、相手の言っていることを最終的に肯定するにせよ否定するにせよ、その前に『よく吟味する』『きちんと評価する』という意味」¹⁶で用いられている。換言すれば、〈批判〉を「他人の主張を鵜呑みにすることなく、吟味し評価するための方法論」¹⁷として捉えているようである。

しかし、上記の諸研究に共通している点には、課題とすべきものもある。例えば、一見して明らかなように、〈批判〉をめぐる言説はそもそも当該の語の定義が多様を極めている。そこでは、それぞれの論者が依拠する先行研究等が参照されているが、その根拠や整合性は必ずしも詳細に検討されているわけではない。したがって、〈批判〉を取り巻く言説の状況は今なお混迷の様相を呈していると言えよう。もちろん、そのような現状において、それぞれの議論を評価し、また分類することにも一定の意義は認められるだろう¹⁸。しかし、問題はそのような概念の分類や細分化が、実践的应用に十分に活かされていない現状にある。このことは同時に、〈批判〉に関する実践的研究が、すぐさま授業実践の報告等に陥ってしまっている点からも伺われる。つまり、概念的な研究と実践的研究とは必ずしも学術的な裏づけをもってしてつながりを担保されているわけではないということである。

このことについて田中・豊は、「クリティカルシンキングの概念の多様性・複雑性について確認や統一のための議論がどの程度行われているか、明白ではない。概念や方向性の確認が行われないままのアプローチでは、クリティカルシンキング教育には枠組みが存在

しないということになりかねない。しかも、クリティカルシンキングを『学士力』の一つとして大学で教えるべきという方向性は確認されても、その内容をカリキュラムに明示するというよりは、個々の教員がそれぞれの授業科目内で教えることに委ねる方針をとる大学が少なくないのではないか¹⁹と指摘している。また道田も、〈批判〉の概念や目的、方法等の「多様性が批判的思考教育や研究の妨げとなるのではなく、より豊かで確かな実践を生み出すためには、特定の批判的思考概念や目的、教育方法、測定方法などを自明のものとするのではなく、それぞれの内実を丁寧に吟味し、必要なものを適切に選択していくことが重要であろう²⁰と述べている。本稿はこの問題意識を共有し、〈批判〉の思考技法としての在り方を探求する。

この思考技法としての〈批判〉は、学術的に裏付けられたものでなければならない。なぜなら、同じく道田が指摘するように、〈批判〉に関する、特に実践を視野に入れた研究の「現状では紀要論文や学会発表が多く、研究の深まりとしてはこれから²¹だからである。それゆえ、本稿は〈批判〉を新たに学術的に基礎づけられた思考技法として構想していく。つまり、それは現象学という哲学の立場から、〈批判〉という思考技法の営みに1つの基礎を与える試みと言える²²。換言すれば、本稿はまず原義から〈批判〉概念を再考し、そこから現象学的に基礎づけられた思考技法としての〈批判〉の具体的な手続きを明らかにしていく試みである。それゆえ、次節では〈批判〉という語のそもそもの意味を改めて掘り起こし、その原理的な意義を探っていく方途を辿りたい。なぜなら、すでに見たようにこれほどまでに多様に展開される議論も、はじめは1つの概念からスタートしたはずであり、したがってそこに立ち戻ることは、その原義から思考することを可能にすると考えられるからである。そしてそこから、思考技法としての〈批判〉の内実に迫っていききたい。

3. 〈分けること〉としての〈批判〉：後期ハイデガーとメルロ＝ポンティ

3-1. 『ツォリコーン・ゼミナール』における〈批判〉

すでに小柳によって指摘されているように、「Critic」、「Critical」、「Criticize」、「Criticque」、「Criticism」といった英語の訳語として『批判』といった言葉が使われている研究の動きがある²³と言える。彼は、これらの語の「語根である“cri-”に着目し、それが「ラテン語やギリシア語を基にするもの」であることを指摘しているものの、これについてはわずかに、「ギリシア語のkrinein (=judge, decide: 決定する、選別する)などが関連語の意味に影響を及ぼしている」と述べるに留まっている²⁴。これについてさらに詳細に論じているのが、ドイツの哲学者ハイデガーである。そのため、ここではその議論が展開される彼の『ツォリコーン・ゼミナール *Zollikon Seminare*』に焦点を絞り、〈批判〉の語源とそこから派生する議論を検討したい²⁵。

『ツォリコーン・ゼミナール』は、ハイデガーが最晩年に行った、精神科医のボス (Boss, M.) との対話や若手の医師らを相手にした文字通りゼミナールの記録である²⁶。ハイデガーはそこで、当時の最先端の科学技術や医学について、まさに〈批判〉的な議論を展開している²⁷。彼はまず、先ほどの〈批判〉のギリシャ語源について、「批判 (Kritik) は、ギリシャ語のクリネイン (κρίνειν) に由来し、区別する (unterscheiden) こと、〔他

のものから] 際立たせる (abheben) ことを意味」²⁸すると述べる。ここで重要なことは、〈批判〉という行為にいわゆる価値判断は含まれないことであろう。つまり、善悪等の判断をすることは、〈批判〉の本来的な機能ではないのである。したがって、「本当の批判は、あら捜しをする、とがめる、いびるという意味での批判 (kritisieren) とは別のもの」²⁹であることになる³⁰。

ハイデガーが区別することと述べた〈批判〉の本来の意味を、ここではその中立的な意味合いをより強調するために、〈分けること〉と標記したい。その〈分けること〉としての〈批判〉の特徴について、彼は独特の言いまわしで、「異なっているものを異なっているものとして、それがいかなる点で異なっているかに関して見させる (sehen lassen) ということを意味」³¹すると述べる。ここでは、「異なっているもの」はあくまでも単に「異なっているものとして」捉える必要性が指摘されている。そして強調されるように、それは「異なっている」から悪いであるとか、また「異なっている」から善いといった価値判断をする手前で、「いかなる点で異なっているのか」を見つめようとする態度を求めている。なぜなら、彼が言うように、「異なっているものが異なっているというのは、ある観点で異なっているということにすぎ」³²ないからである。

この「ある観点」が、本来的な〈批判〉において、重要な意味を持つ。通常われわれが或る対象を知覚したとき、その対象に抱く第一印象には、すでにこの「ある観点」が前提されている。それゆえ、その印象が良いものであれ悪いものであれ、すでに自らの「観点」が反映されていることになる。そして、ハイデガーが言う本来的な〈批判〉の遂行には、まずもってこの自らが無自覚のうちに有してしまっている「観点」の自覚が不可欠なのである。すなわち、「この観点でわたしたちはまず同じもの (das Selbe) を見て取り、この同じものという観点で、異なっているものは一つの〔「同じもの」と共通の〕集合に共属しているのです。区別するときにはつねに、この同じものを見て取らねば (亀甲括弧内翻訳者)」³³ならないのである³⁴。だからこそ、「本当の批判はこのように見させることとして、卓越した意味で積極的な行為」と言えるのであり、またそれゆえに、「本当の批判は稀」なのである³⁵。そして、彼はこの論述を、「本当の、それも現象学的な批判が必要」³⁶であると締めくくっている³⁷。

ここでハイデガーが現象学的な〈批判〉の必要性を主張する理由は、次のように理解することができる。すなわち、現象学という思考が、価値判断を一度停止——判断停止 (エポケー)³⁸——し、先入見を排除し、そこから「事象そのもの」に向かうことを目指すというその特徴が、ここまで論じてきた〈批判〉の本来的な在り方と見事に重なり合っているのである³⁹。だからこそ、ハイデガーは〈批判〉が現象学的であるべきだと指摘したのである。

しかし、〈分けること〉であるその現象学的〈批判〉とは、どのようにして可能になるのであろうか。この方法を探るために、その具体的な事例の検討に先立って、そこで必要となる考察態度を検討しておきたい。なぜなら、木田が指摘するように、「方法とは本来、デカルトの解析の方法やヘーゲルの弁証法がそうであったように、思考のスタイル、研究対象に立ち向かう態度のこと」⁴⁰だからである。それゆえ、次に現象学的〈批判〉に不可欠となる、その考察態度を明らかにしたい。

3-2. メルロ＝ポンティと〈考えないでしまったこと〉

そもそも現象学は、フッサールによってその基本的な思考の枠組みが形成されたと言える。ここで現象学の歴史そのものを追うことはしないが⁴¹、必要なことは、現象学的〈批判〉に求められる考察態度を明確にすることである。したがって、ここではハイデガーの思想を積極的に取り入れ⁴²、なおかつ、自身もこの現象学的〈批判〉の営みを実際に遂行しているメルロ＝ポンティの記述を手がかりに、この課題に取り組んでいきたい。

メルロ＝ポンティは多くの現象学的著作を残しており、それらのなかには、1つの共通する考察態度を指摘することができる。本項では、その特徴的な考察態度を〈考えないでしまったこと〉への視線という在り方として浮き彫りにし、それが現象学的〈批判〉において不可欠となることを明らかにする。なお、この〈考えないでしまったこと〉という奇妙な用語は、フッサールの生誕100年記念論文集に発表した論文「哲学者とその影 *Le Philosophe et son ombre*」において、メルロ＝ポンティ自身が用いているものである⁴³。

「哲学者とその影」というこの論文の表題について付言すると、「哲学者」という表記が指しているのは、先に言及した現象学の祖フッサールであり、そして「その影」とは、フッサールが〈考えないでしまったこと〉を意味している。これについて、メルロ＝ポンティは、「フッサールがその生涯を終えたときにも、フッサールの〈考えないでしまったこと〉 *impensé*があったわけであり、これは完全にフッサールのものではあるのだが、やはり他にも開かれたものなのだ⁴⁴と述べている。

このメルロ＝ポンティの指摘については、次の注意が必要である。すなわち、フッサールが〈考えないでしまったこと〉は、2つの在り方をしているという点である。1つは、文字通り、フッサール自身が生前においても課題として捉えていた事柄であり、もう1つは、フッサール自身はそれと自覚せずに、むしろ彼の研究成果から間接的に導き出された事柄である。したがって、その課題が「他にも開かれたもの」であるというメルロ＝ポンティの指摘は、単にフッサールの死後に残された研究課題というだけの意味ではなく、それと並行して、フッサールが生きていたときにすでに存在していた論点をも指し示している。メルロ＝ポンティが自身の論文の題名において、哲学者＝フッサールの「影」と呼んでいることは、むしろこの後者の重要性を強調していると捉えることができる。つまり、それはフッサールの〈考えたこと〉の「影」として見出される問題なのである。われわれが何かを「思索するということは、思考の対象を所有することではなく、考えるべき領域を、したがってまだわれわれが考えていない領域をその対象によって限ることなのである⁴⁵とメルロ＝ポンティが述べるのも、このためである。換言すれば、「考えるべき領域」と「考えていない領域」を適切に〈分けること〉が、まさに現象学的〈批判〉なのである。

このような考察態度を、鷺田はより具体的に日常性の探求において論じている。彼によれば、日常とは「われわれがいつもそこに浸って生きているありふれた自明性の世界⁴⁶であり、その「日常は、生の見えない土台、見えない背景をなすからこそ日常⁴⁷なのである。鷺田が指摘するこの〈見えないこと〉と、先に指摘した〈考えないでしまったこと〉との間に相同を見ることは難しくない。すなわち、〈考えたこと〉の影としての〈考えないでしまったこと〉と、〈見えること〉の影としての〈見えないこと〉との類似である。つまり、〈考えないでしまったこと〉や〈見えないこと〉は、それが自明であるがゆえに特別に意識されることがないものの、それは日常を支える「生の見えない土台」であり「見えな

い背景」なのである。このことは、鷺田もわれわれと同様に、現象学的な立場から思考していることから明らかであろう⁴⁸。

この〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度をとる鷺田は、その考察の特徴を、彼の日常性の探求において次のように述べている。

日常はこれまでのところ、「～でない」というふうにながらに否定的にしか規定できなかった。日常は、日常的な意識にとって、歴史的な出来事の対項としてあくまでその惰性性あるいは不活性性において捉えられていたし、さらにそのような対立をわれわれは仮構された関係として宙づりにしたのであった。しかしさしあたって否定的にしか対象化しようがないというわれわれのとまどいは、ハイデggerによれば「この現象の固有性を告知する」ものである。とすれば、「偽装や隠蔽を棄却する」という迂路をとらざるをえないというのは、むしろことがらそのものが要求していることなのかもしれない。自明のこととしていつもすでに何らかの仕方で「見られて」いながら、しかもいつもすでに誤って解釈され、「見えなく」されているということが、われわれの存在体制そのもののうちに根柢をもっているのかもしれない⁴⁹。

ここで鷺田が日常を例に指摘しているように、〈考えないでしまったこと〉や〈見えないうこと〉は、その本来の性質ゆえに、それを直接的に捉えて論じることは難しい。なぜなら、「日常性の特質はそれが自明であるということ、つまり問いの対象になりえないという点にあるから、日常性はその内部にとどまるかぎりどうしても主題化されえない」⁵⁰からである。だからこそ、その〈考えないでしまったこと〉を明るみに出すためには、すでに〈考えたこと〉を〈批判〉的に捉え、その影を見えるようにすることが求められると言えよう。

このような考察態度を、〈考えないでしまったこと〉への視線と呼ぶことができる。思考技法としての現象学的〈批判〉にとって、この基本的な考察態度は不可欠である。この考察態度なくしては、すでに他者によって述べられたことやこれまで蓄積されてきた研究成果等を適切に捉えることはできないだろう。何が論じられ何が論じられていないのか、何が明らかになり何が課題として残されているのか、つまり、〈考えられたこと〉と〈考えないでしまったこと〉を適切に〈分けること〉を実行し、特にその後者に光を当て、それを見せようとする態度が、現象学的〈批判〉という思考技法の根幹にあるべきモチベーションなのである。

この考察態度は、ある対象を〈批判〉的に思考するため、次のことを要求する。すなわちそれは、対象となる事柄について、それを「否定的にしか対象化しようがない」ものとして捉えていくことである⁵¹。つまり、すでに〈考えられたこと〉を肯定的に捉え、それに則っているだけでは、その限界を明らかにし、新たな可能性を探求していくことはできないのである。だからこそ、この考察態度に基づく現象学的〈批判〉という行為は、ネガティブな結論を導くためでも単なる現状非難でもなく、われわれが〈考えないでしまったこと〉を適切に捉えるために必要となるのである⁵²。

では、そのようなすでに〈考えたこと〉に対する〈批判〉は、一体どのようにして遂行されるのであろうか。換言すれば、それはどのような方法的手続きによって進められる必

要があるのだろうか。〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度とともに、その方法的な手続きを明確にすることは、思考技法としての現象学的〈批判〉を提示するためには不可欠であろう。したがって本稿の最後に、メルロ＝ポンティ自身による現象学的〈批判〉の事例を追い、そこから具体的な方法的手続きの在り方を探っていく。

4. 〈内破する思考〉という方法：『行動の構造』における事例

〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度において、メルロ＝ポンティの方法的な手続きが顕著に現れている例として、『行動の構造 *La structure du comportement*』に着目したい。メルロ＝ポンティのこの著作は、古典的な心理学や生理学への〈批判〉的なまなざしとそれを乗り越える視点の提示という性格を有している。このような手続きを、加賀野井は「批判作業」⁵³と呼んでいる。それは、当時の「最先端のそれぞれの知見に対し、当時支配的であった哲学理論から解釈しようとするとおかしなことになってしまう、ということを一洗いで洗っていく」⁵⁴作業である。そして、この作業を遂行するためには、まずその〈批判〉対象となる理論に徹底的に寄り添い、その思考の道筋を丁寧に辿ることが必要とされる。メルロ＝ポンティが、『行動の構造』や『知覚の現象学』において、機械論的な生物学や行動心理学、さらには反射に関する古典的生理学について、あれほどまでに詳細かつ冗長とも思える記述を行っている理由も、この作業の一環として理解されるのである。

『行動の構造』の冒頭においてメルロ＝ポンティは、「われわれの目的は、〈意識〉と〈自然〉——有機的、心理的、さらには社会的な自然——との関係を理解することである」⁵⁵と、まさに哲学的考察に相応しい言葉を述べているにもかかわらず、実際は著作の大部分を、「哲学の伝統的主題とはとても言えない『行動』という概念の分析」⁵⁶に充てている。具体的には、彼は「行動」の概念について、まず従来の反射学説が人間の行動を刺激と反応の因果関係としてしか説明していないことを指摘し、それが現実の行動を説明しきれておらず、その正しい理解のためにゲシュタルト的な視点が必要であることを示す（第1章「反射行動」）。その上で、条件付けの概念に典型的に見られる行動主義的な心理学が提唱する学習観を批判することによって、ゲシュタルト的な視点からは人間の行動がある種の層構造を有するものとして理解されることを指摘する（第2章「高等な行動」）。さらに、そのそれぞれの層の関係を、1つの統合された秩序として描きだし（第3章「物理的秩序、生命的秩序、人間的秩序」）、最終的にその構造としての秩序の在り方が、心と体を実体と捉える心身二元論への反駁として提示されるのである（第4章「心身の関係と知覚的意識の問題」）。

『行動の構造』の議論自体は以上のような流れで進められていくのであるが、ここでわれわれが着目しなければならないのは、その内容よりも、むしろ彼がそこでとる方法的な手続きである。上に粗描したように、彼は古典的な生理学の見解について、ゲシュタルトという新たな概念を参照することで、その誤りを指摘している。しかし、彼の方法的な手続きの特徴は、むしろその先にある。すなわちそれは、ある段階まで考察を進めるための強力な視点として用いられていたゲシュタルト概念さえも、考察の次の段階では〈批判〉の対象となってしまうところにある。

すでに述べたように、彼は古典的生理学による行動の反射としての理解を、ゲシュタルト概念を手がかりに、構造として捉え直す必要性を示している。しかし、そこで議論は完結せず、彼は次のように問う。「だが、それにしても、いったい生物的構造や心的構造を物理的構造にもとづけることによって、はたしてゲシュタルト心理学が望むように真にそれらの独自性を保持しうるであろうか。」⁵⁷ この問いに対する彼の結論は否定的である。すなわち、従来の「ゲシュタルトの概念は、こうした唯物論的帰結においても、また最初に示しておいた唯心論的解釈においても、そのもっとも重要な帰結に達するまで追及されていない」⁵⁸と彼は考える。なぜなら、「ゲシュタルトが、科学的探究そのもののなかであらわれてきたとすれば、心理学の実在論的要請にたいしていかなる批判を要求しうるかを反省するかわりに、彼らはゲシュタルトを自然の出来事のひとつに数え、またその概念をも原因とか実在的事物といった概念のように用いており、そのかぎり彼らはもはや『ゲシュタルト』に即しては考えていない」⁵⁹からであるということになる。

このように、古典的な反射学説を〈批判〉するために援用されたゲシュタルト概念は、当初心理学的な視点から提唱されていたのであるが、メルロ＝ポンティにおいてはどのように考察のための視点となっていたものさえもが、最終的には彼自身によって〈批判〉され、捉え直され、新たな概念へと練り上げられていったと言える。この過程はまさに、ハイデガーが「ある観点」と述べた地点から、一歩先に進み、反射学説と心理学的知見との間に「同じもの」を見て取ることを意味している。メルロ＝ポンティは、そのような手続きの必要性を次のように述べている。

われわれはふたたびゲシュタルトの概念に立ちかえり、いかなる意味においてゲシュタルトが物理的世界の「なか」や生体の「なか」にあると言われうるのかをたずね、ゲシュタルトを契機とする二律背反の解決や、自然と理念との総合を、ゲシュタルト自身に問おうとするのである⁶⁰。

ここからわれわれは、メルロ＝ポンティの思索における、方法的な手続きを抽出することができる。それは、1つの考察対象に徹底的に寄り添い、その思考の道筋を丁寧に追い、その上で、その対象を〈批判〉的に組み替えていく営みである。このような方法的な手続きを、〈内破する思考〉と呼びたい⁶¹。それは、すでに〈考えたこと〉の限界を明らかにし、それを内側から破ること——内破——によって、〈考えないでしまったこと〉に到達しようとする、まさに思考技法としての現象学的〈批判〉における方法的な手続きである。

この〈内破する思考〉と呼びうる考察の手続きについて、メルロ＝ポンティは、考察の対象を「取り上げなおし、わがものにし、内面化し、内在化しようとする反省の努力」⁶²であると述べている。そしてそれは、彼によれば、「すでに与えられてあるもの——そして、まさしくそれを探し求めるまなざしの前では、みずからの超越性のうちに引きこもうとするような何ものか——に対して向けられるのでなければ意味がない」⁶³という特徴を有するものである。このような方法的な手続きについて、加賀野井は、「既存の哲学理論がどこにおいて破綻せざるをえないかを描き出す作業」⁶⁴であると述べているし、また河野も、「彼の思索の発展は、以前に取り扱った課題を何度も取り上げ直し、そこに徐々に独自

の意味をあたえていく過程である」⁶⁵とし、その思考技法としての手続きの特徴を指摘している。

もちろん、メルロ＝ポンティ自身が考察の対象としたのは哲学理論そのものであり、したがって、そこにおける考察態度や方法的な手続きを本稿が目指す思考技法として措定できるのかという疑問があり得るかもしれない。しかし、以上の議論を踏まえるならば、それは十分に可能だと言えるだろう。再び加賀野井を引けば、「メルロ＝ポンティの思想には、研究対象や研究内容の問題だけではなく、私たちの研究の仕方、ものの考え方、つまりは生きていくスタイルとでも言うべきものをまるごと教えてくれる側面もある」⁶⁶と考えられるからである。このことを傍証するように、彼の思想は、哲学に限られない多くの領域でさまざまな議論を生んでいる⁶⁷。これらのことから、メルロ＝ポンティが自ら体现している〈内破する思考〉は、思考技法としての〈批判〉においても、その方法的手続きとしての妥当性を有していると考えられるであろう。

5. まとめ：現象学的〈批判〉の可能性

本稿では、教養教育における思考技法としての現象学的〈批判〉の在り方を検討した。この試みは、すでに述べたように、〈批判〉概念の分類や整理でもなく、また単なる実践例の紹介でもなく、むしろそれらの中間に位置している。すなわち、本稿は〈批判〉を、思考するための1つの技法として検討し、それを現象学の立場から基礎づけることを試み、その内実を探ったのである。

この〈批判〉は、第一義的に、〈分けること〉として機能しなければならない。ハイデガーがギリシャ語源に言及しながら述べたように、それが本当の〈批判〉の条件である。さらに、その〈批判〉は〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度を基盤に保持している必要がある。この考察態度を欠いた思考は、先入見を排除できず、結果として自らが有している「ある観点」を自覚することを困難にする。そのような思考は、〈批判〉的なものにはなり得ないだろう。自分や他者がこれまで〈考えないでしまったこと〉、換言すれば思考の影を見ようと努めることは、現象学的〈批判〉を遂行するための重要なモチベーションなのである。この考察態度を備えてはじめて、〈内破する思考〉が現象学的〈批判〉の方法的な手続きとして機能することができる。対象の論理を丁寧に追い、適切に理解するという過程を経たうえで、対象を本当の意味で〈批判〉的に捉え、その「観点」を乗り越えること。このある意味で弁証法的な手続きが、現象学的〈批判〉を思考技法として実践するために求められるのである。いずれにしても、思考技法としての現象学的〈批判〉はこのようにその全体像を素描することができるであろう。

そしてまた、加國の次の指摘は、この〈批判〉が多様な領域を含む教養教育において、1つの思考技法として実践的に適用されうることをまさに示している。すなわち、「メルロ＝ポンティの哲学は、客観科学の存在論的前提への批判ではあるが、客観化以前の記述を重視するだけではなく、科学と対話を行ないながら哲学の問題を提示していくというスタイルを持っている」⁶⁸。本稿のはじめにも言及したように、現代はまさしく知識基盤社会に突入している。そこでは、あらゆる物事が高度に情報化され、それを科学・技術によってコントロールするようになってきている。そのように急速に変化する日常のなかで、われ

われは多くの問いに直面して生きていかなければならない。例えば、人工知能、すなわちAI技術の発展は、われわれの未来を明るくするように思われる一方で、同時に、それは人間の職業の幅を狭めることになるかもしれない⁶⁹。このような問題の是非を考えなければならぬ場合、先入見や印象に基づいて即座に価値判断することは危険であろう。それゆえ、何が可能性であり何が危険性であるのか、また何が真実で何が虚偽であるのか等を、適切に〈分けること〉によって、〈批判〉的に見極めなければならない。そしてそのためにこそ、本稿で論じた思考技法としての現象学的〈批判〉が必要なのである。それはある意味で、現在の混沌とした世界をわれわれが賢く生きるための技法なのである。

注及び引用・参考文献

- 1 もちろん、批判と批判的思考、また批判的思考とクリティカルシンキング等、これらはその意味内容を同じにしているわけではない。例えば、道田は「『批判的思考』 = 『批判すること』という誤解」があると指摘している。道田泰司（2015）近代知としての批判的思考：定義の変遷をたどる。楠見孝・道田泰司編。批判的思考：21世紀を生き抜くリテラシーの基盤。新曜社、p.2。しかし、本稿は教養教育における〈批判〉の思考技法としての在り方について、その語源に立ち返り、現象学的立場からその実践的応用可能性を検討することを目的としている。この目的を達成するためには、これらの区別はむしろ本来批判という語が有していた豊かな意味内容を制限することになると考えられるため、本稿では〈批判〉として一括して論じる。
- 2 同上書、p.2。
- 3 反知性主義に関する議論は、近年急速に広まっていると言える。代表的なものとして、以下を参照されたい。内田樹ほか（2015）日本の反知性主義（犀の教室）。晶文社。；森本あんり（2015）反知性主義：アメリカが生んだ「熱病」の正体。新潮社。さらに、青土社が発行する雑誌現代思想は、2015年2月号において、「反知性主義と向き合う」という特集を組んでいる。
- 4 日本学術会議／日本の展望委員会／知の創造分科会（2010）21世紀の教養と教養教育、p.3。
- 5 柴田義松（2006）批判的思考力を育てる：授業と学習集団の実践。日本標準。
- 6 同上書、p.19。
- 7 同上書、pp.76-95。；pp.122-189。
- 8 同上書、p.202。
- 9 国語科教育に関するものとしては、例えば以下を参照されたい。光野公司郎（2002）国語科教育におけるメディア・リテラシー教育：説明的文章指導（中学校第二学年）における批判的思考力育成の実践を中心に。国語科教育、52、pp.56-63。；篠原嶺（2013）クリティカル・シンキングの育成を目指した基礎的研究：国語科教育からのアプローチ。奈良教育大学教職大学院研究紀要学校教育実践研究、5、pp.57-61。；吉樂均（2015）論理的・批判的思考力を育成する汎用的スキルの工夫：「論理のピラミッド」を活用した意見文作成の授業実践から。教育実践研究（上越教育大学学校教育実践研究センター）、25、pp.1-6。
- 10 竹田育子（2016）高等学校における批判的思考力を育む英語授業開発。鳥根大学大学院教育学研究科「現職短期1年コース」課題研究成果論集、7、pp.51-60。
- 11 佐藤正実（2011）「資料の活用」領域における授業研究：批判的思考に着目して。数学教育研究（新潟大学教育学部数学教室）、46(1)、pp.1-19。
- 12 例えば、以下を参照されたい。徳永悟ほか（2016）児童・生徒の批判的思考力を高める理科教育の在り方。宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要、24、pp.67-75。；高橋壮臣（2015）中学校の授業歴史資料を批判的に見ることの大切さに気づく：上高森遺跡の捏造事件を事例として。歴史地理教育、843、pp.42-47。；土屋善和（2016）家庭科における批判的思考を促す授業の検討：コーヒーを教材として。琉球大学教育学部紀要、88、pp.107-119。
- 13 田中桂子・豊浩子（2016）大学におけるクリティカルシンキング教育：その現状と課題。明治学院大学国際学研究、49、p.2。
- 14 久保田祐歌・池田史子（2015）大学教育におけるクリティカルシンキング：育成課題の検討。名古屋高等教育研究、15、p.144。

- 15 田中は、「これまでアメリカを中心とした欧米諸国で積極的に行われてきた批判的思考教育への取り組み」が、近年ではオーストラリアやシンガポール、さらにはタイといった、アジアや太平洋地域においても推進されている現状を報告している。田中優子（2015）諸外国の批判的思考教育：オーストラリア／シンガポール／タイ。楠見孝・道田泰司編。上掲書，pp.174-179.
- 16 伊勢田哲治ほか編（2013）科学技術をよく考える：クリティカルシンキング練習帳。名古屋大学出版会，p.iii.
- 17 同上書，p.iii.
- 18 田中・豊は、この言説の変遷を詳細にまとめている。詳しくは以下を参照されたい。田中桂子・豊浩子（2016）上掲書，pp.1-23.
- 19 同上書，p.2.
- 20 道田泰司（2013）批判的思考教育の展望。教育心理学年報，52，p.136.
- 21 同上書，p.136.
- 22 哲学的思考と〈批判〉的思考との関係について、伊勢田は議論の前提の違いに注意する必要性を指摘したうえで、次のように述べている。そうした「文脈の違いに注意するなら、疑う態度や正しい思考法についての知識とスキルの重視など、その根幹の部分において哲学的思考と一般の批判的思考は共通部分を多くもつ。相互に参照することでより双方の理解を深めることができるだろう。」伊勢田哲治（2015）哲学と批判的思考。楠見孝・道田泰司編。上掲書，p.13.
- 23 小柳和喜雄（2003）批判的思考と批判的教育学の「批判」概念の検討。教育実践総合センター研究紀要（奈良教育大学），12，p.11.
- 24 同上書，p.11. またこれら概念規定の問題については、すでに述べたように本稿では詳述しないが、以下の文献に詳しいので参照されたい。森本洋介（2014）メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成。東信堂，pp.68-96.
- 25 なお、翻訳語としての「批判」という語そのものについて、その歴史的経緯などに関する詳細な議論は管見では見当たらない。これについては稿を改めて検討してみたい。
- 26 ハイデガー，M.（ボス，M.編；木村敏・村本詔司訳）（1987/1991）ツォリコーン・ゼミナール。みすず書房.
- 27 この意味において、ハイデガーの議論は昨今盛んになされている「科学・技術リテラシー」に関する議論の先駆的な位置にあるとも言えよう。なお、この科学・技術リテラシーについては、次の文献を参照されたい。原壘（2015）科学・技術リテラシー：民主主義と国際競争力の基盤となる能力。楠見孝・道田泰司編。上掲書，pp.192-197.
- 28 ハイデガー，M.（1987/1991）上掲書，p.111.
- 29 同上書，p.111.
- 30 すでに指摘したように、学術研究レベルではこのことは共通に理解されているものの、実践レベルにおいては未だに周知されているとは言えないであろう。したがって、強調の意味も込めてここで繰り返し指摘しておきたい。
- 31 同上書，p.111.
- 32 同上書，p.111.
- 33 同上書，p.111.
- 34 このやや難解な表現について、ハイデガーは色を例に次のように補足している。「簡単な区別の例として、緑と赤は、色というようなものがわたしたちに前もって与えられているからこそ区別できるのです。同じものとはここでは色であり、この観点ではじめて区別が遂行されるのです。」同上書，pp.111-112.
- 35 同上書，p.111.
- 36 同上書，p.112.
- 37 補足すると、ハイデガーが『ツォリコーン・ゼミナール』のこの箇所を試みようとしたのは「心身のなものを問題として展開」することであり、そのために現象学的な〈批判〉の必要性を主張している。本稿の直接的なねらいはこの試みとは異なるものの、少なくとも〈批判〉の本来的な在り方をハイデガーのこの記述から抽出することは可能であろう。同上書，p.112.
- 38 判断停止（エポケー）とはフッサール現象学における根本概念であり、和田はそれを「反省的方法概念」と呼んでいる。彼によれば、この概念は「現象学的エポケー」と「普遍的エポケー」に大別され、特にその前者は次のように説明される。すなわち、現象学的エポケーとは、「意識と対象との相関的結びつきを考察するために、意識が対象と素朴に関わる『自然的態度』を『遮断』し、それ

- を根本的に変更する方法的懐疑の操作を意味する。その操作においては、自然的態度における一般定立が排去されて括弧に入れられ、いわばそのスイッチが切れ、定立がストップされる」ことになるという。ここからも明らかなように、現象学と〈批判〉には、その思考の在り方において高い親和性を見ることができるといえる。和田渡（1994）エポケー。木田元他編。現象学事典。弘文堂、p.42.
- 39 「事象そのものへ *zu den Sachen selbst*」という標語が、フッサールが創始した現象学の基本的な研究態度を示すスローガンであることはよく知られているが、立松によれば、正確にこのように述べたのはハイデガーである。立松弘孝（1994）事象そのものへ。木田元他編。上掲書、pp.186-187. なお、フッサール自身は次のように述べるに留まっている。「もろもろの事象に関して理性的にもしくは学問的に判断するということは、ところで、事象そのものに準拠するということであり、別言すれば、言説や思いこみを捨てて事象そのものに立ち帰り、事象をその自己所与性において問いただし、事象に無縁なすべての先入見を排斥するというにほかならない。」フッサール、E.（渡辺二郎訳）（1950/1979）イデー：I-I。みすず書房、p.102.
- 40 木田元（1970）現象学。岩波書店、p.8.
- 41 現象学は、スピーゲルバークが現象学運動 *the Phenomenological Movement* という著作名によって示しているように、世界中の多くの論者によって多様な展開を見せており、それ自体を1つの歴史的な運動と捉えることもできよう。スピーゲルバーク、H.（立松弘孝監訳）（1982/2000）現象学運動：上・下。世界書院。
- 42 ロックモアは、メルロ＝ポンティに代表される「フランス哲学は、多くの理由から、長いあいだ異常なまでにハイデガー理論に対して受容的であった」と述べ、その影響を指摘している。ロックモア、T.（北川東子・仲正昌樹監訳）（1995/2005）ハイデガーとフランス哲学。法政大学出版局、p.9.
- 43 メルロ＝ポンティ、M.（木田元・滝浦静雄共訳）（2001）哲学者とその影。みすず書房、p.149.（Merleau-Ponty, M. (1959) *Le philosophe et son ombre*. dans *Signes* (1960). Gallimard. p.202.)
- 44 同上書、p.148.（Ibid. p.202.）
- 45 同上書、p.148.（Ibid. p.202.）
- 46 鷺田清一（1997）現象学の視線。講談社、p.35.
- 47 同上書、p.34.
- 48 鷺田は次のように述べている。「これまで思想の歴史のなかで問題として何度も顔をのぞかせながら、他の問題群をひきずりこんでひとつの問題系へと収斂することなく立ち消えになっていった日常性の問題を、現象学が現代もう一度取り上げなおすのはこのような（地平という）視角からである。」（括弧内引用者）同上書、p.36.
- 49 同上書、p.29.
- 50 同上書、p.34.
- 51 田口も、考察の対象をまずは否定的に捉え、迂回するような手続きを経て対象に接近していく必要性を指摘し、そのような現象学的な思考の特徴を次のように述べている。「自明なものは、主題的意識に対して自らを隠すことにおいてこそ、その力を存分に発揮することができる。それゆえ、自明性の界域を探索するには、通常の知のモード、主題的に確実性を追求するモードで向かうわけにはいかない。それでは、自明性は自らを閉ざしてしまう。そこには、独特の工夫が必要になる。それが『現象学という思考』を特徴づける。」田口茂（2014）現象学という思考：〈自明なもの〉の知へ。筑摩書房、p.252.
- 52 この〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度は、メルロ＝ポンティの議論を独自に発展させた現象学者アンの議論にも同様に指摘することができる。これについて庭田は、「われわれのこのアンの『生の哲学』のための試論は、どうしても『見えるものと見えないもの』ではなく、『見えるものから見えないものへ』でなければならない」と指摘している。このことも、〈考えないでしまったこと〉への視線という考察態度の意義を示す、1つの例となろう。庭田茂吉（2001）現象学と見えないもの：ミシェル・アンの『生の哲学』のために。見洋書房、p.1.
- 53 加賀野井秀一（2010）湧き続ける魅力：メルロ＝ポンティの思想を辿る。メルロ＝ポンティ。河出書房新社、p.24.
- 54 同上書、p.24.
- 55 メルロ＝ポンティ、M.（滝浦静雄・木田元訳）（1942/2014）行動の構造：上。みすず書房、p.25.（Merleau-Ponty, M. (1942/2009) *La structure du comportement*. PUF. p.1.）
- 56 宮原克典（2010）主著解題『行動の構造』。メルロ＝ポンティ。河出書房新社、p.35.
- 57 メルロ＝ポンティ、M.（滝浦静雄・木田元訳）（1942/2014）行動の構造：下。みすず書房、p.17.

- (Merleau-Ponty, M. (1942/2009) op.cit. p.146.)
- 58 同上書, p.18. (Ibid. p.147.)
- 59 同上書, pp.18-19. (Ibid. p.147.)
- 60 同上書, p.19. (Ibid. p.147.)
- 61 なお、この〈内破〉という語については、以下の文献からその着想を得ている。栗原彬ほか（2000）内破する知：身体・言葉・権力を編みなおす。東京大学出版会。
- 62 メルロ＝ポンティ, M. (2001) 上掲書, p.152. (Merleau-Ponty, M. (1959) op.cit. p.204.)
- 63 同上書, p.152. (Ibid. p.204.)
- 64 加賀野井秀一（2010）上掲書, p.24.
- 65 河野哲也（2000）メルロ＝ポンティの意味論。創文社, p.38.
- 66 加賀野井秀一（2010）上掲書, p.33.
- 67 メルロ＝ポンティの思想が特に参照されている領域として、今日では看護学を挙げることができる。次の文献は、その代表的な研究である。西村ユミ（2001）語りかける身体：看護ケアの現象学。ゆみる出版。また、併せて指摘しておきたいのは、この看護学の領域においても、昨今盛んに〈批判〉的思考力の育成に関する議論がなされていることである。これも単なる偶然の一致ではないように思われる。例えば、以下を参照されたい。鈴木亜衣美ほか（2015）看護学生のクリティカルシンキングが看護実践力へ及ぼす影響。大阪府立大学看護学部紀要, 21(1), pp.13-23.
- 68 加國尚志（2014）解説。メルロ＝ポンティ, M. (1942/2014) 上掲書, p.211.
- 69 なお、このAI問題の詳細な議論に関しては、最近の諸研究が多くの示唆を与えてくれる。例えば、以下を参照されたい。カプラン, J. (安原和見訳) (2015/2016) 人間さまお断り：人工知能時代の経済と労働の手引き。三省堂。；小林雅一（2015）AIの衝撃：人工知能は人類の敵か。講談社。